



友の会 会報

TAKAYAMA-UICHI MEMORIAL MUSEUM OF ART

〒039-25

青森県上北郡七戸町字荒熊内67-94

七戸町立鷹山宇一記念美術館内

鷹山宇一記念美術館友の会

TEL 0176-62-5858 FAX 62-5860

平成八年度通常総会を開催

総会議事録

定刻、山本会長の挨拶ついで佐藤鷹山宇一記念美術館館長の挨拶の後、事務担当理事より本日の総会に出席した会員数の報告があった。

本人出席 一九名
委任状出席 八三名
計 一〇二名

規約第一三条により、本会は適法に成立したことを報告した。

ついで、議長の選任について、規約第一一条の規定により会長が議長となり、議事に入った。議長は議事録署名者について、規約第一四条に基づき出席会員のうち、福田幸男と戸館栄一の二人を指名した。

議長は議案審議に先立ち、監事に監査報告を求めた。監事盛田茂樹、西田京子は共に欠席したので、あらかじめ兩名から提出されていた監査報告書を朗読して監査報告を行った。

議案第一号
平成六・七年度事業報告並びに決算報告について

議長の指名により事務担



当の盛田理事は、あらかじめ配布してある資料に基づいて、詳しく説明した。

議長は議場に質問を求めたところ、異議なしとの声があり、議長はその賛否を問うたところ、全員異議なく賛成したので、本件は可決承認された。

議案第二号
平成八年度事業計画並びに予算案について

議長の指名により盛田理事は、あらかじめ配布してある資料に基づいて詳しく説明した。

議長は議場に質問を求めたところ、戸館昭吉会員から次のような提案があった。

事業計画の中で、今年度も年二回程度の研修旅行を計画しているが、公立の大型美術館の研修も良いが、地方の私立美術館にもキラリと輝く美術館もあるので、検討して見ては如何。例えば、盛岡の御所湖川村美術館または福島市の百点美術館とか。又、交通手段として民間の所有するバスの活用も考えてみたらどうだろうか。

議長は、会長として理事会に諮って検討して参りたいと答弁し、質問者もこれに了承した。

他に質問がないので、議長は議場にその賛否を問うたところ、全員異議なく賛成したので、本件は可決承認された。

議案第三号
役員の改選について

議長は現在の理事・監事は本会設立時の理事・監事であり、規約の附則第二により任期となるので、選任方法について議場に諮ったところ、全員留任の声があり、議長は全員留任が良いか、議場に諮ったところ、全員異議なく賛成したので、本件は可決承認された。

さらに議長は、その他質

問・提案等あれば承りたい旨発言した。
石田武男会員から以下のような質問があった。

一 春季二科展(会期平成八年四月二十八日から六月二日まで)と併催の青森二科展の出品作家の中から、作品展示と引替えに入場券五十枚の割り当てがあり、その処理に苦慮しているという話を聞いたが、出来るだけ負担を軽くするように考えてもらいたい。
二 いろいろな催事については協力したいので知らせて欲しい。

議長は、本質問は友の会というよりは美術館の問題だと思えますので、佐藤館長が出席しているのので、佐藤館長から答弁してもらいたい旨発言し、佐藤館長は次のとおり答弁した。

一 春季二科展と併催の青森二科展については、二科の先生方のご理解とご協力によって、鷹山宇一記念美術館だからこそ実現出来たものと確信しております。従って、春季二科展と併催出来たことは、青森二科会の会長始め出品作家も大層喜んでいただくと認識しております。皆様方からも感謝

の言葉を頂戴しております。ご質問の入場券は一枚三〇〇円で五十枚(一五、〇〇〇円)をお願い致しました。出品料を戴きませぬし、又友人知人等にみてもらいたいとすれば、そのくらいの枚数は必要かなと思いい、当方としては五〇〇円を三〇〇円にした訳であります。只、その事が重荷になっているとすれば、今後十分検討し、青森二科会の先生方とも良く相談の上対処して参ります。

2 ボランティアの申入れは有難く、今後会報等でお知らせ致しますのでぜひ参加して下さい。

石田武男会員も了解し、ほかに質問がないので、議長は議案全部が終了したので、閉会を告げ、午後二時五分に散会した。

以上議事の経過並びに結果を明確にするため、議長並びに福田幸男、戸館栄一が署名捺印する。

平成八年七月六日
鷹山宇一記念美術館友の会
平成八年度通常総会
議長 会長 山本洋一
会員 福田幸男
会員 戸館栄一

(事業報告・決算報告は別紙をご覧ください)

今年も盛況、

友の会本年もボランティア協力

昨年を上回る六八七六名の入場を記録



写真右
(左より)テープカットをする池田恭三二科会青森支部長・富士孝衛財団理事長・(一人おいて)鷹山宇一美術館名誉館長・天野三郎二科会理事・佐藤巨美術館長

春季二科展

鷹山宇一記念美術館では、昨年引き続き「春季二科展」を四月二十八日から六月二日までの三六日間にわたって開催いたしました。

吉井淳二先生(二科会理事長・文化勲章受章者)の百号の作品や昨年芸術院会員となられた織田廣喜先生の作品・鷹山宇一先生の作品(二点)など、二科会会員が春季二科展へ出品した絵画八十二点と彫刻十六点が展示されました。また同時にスペイン民芸資料館において二科会青森支部展が並催され、絵画二六点が展示されました。

当館の名誉館長である鷹山宇一先生が理事を務める社団法人二科会のご協力による東北地方では唯一の春季二科展開催とあって、本年も大勢の入場者があり昨年の実績を大きく上回る六八七六名の来館者を記録いたしました。

四月二十七日に行われたオープンングレセプションには二科会理事天野三郎先生はじめ多くの会員の先生方がおいでくださりテープカットの後、会場において

呈茶をおえて

淡交会十和田青年部長
千葉育子

美術館役職員の皆様がたにご協力頂きまして、春季二科展開催中にお呈茶を行わせて頂き、有り難うございました。

私達、淡交会十和田青年部にとりまして初めての試みでした。二科展にいらした方々とってご迷惑だったのではないのでしょうか。

私達は準備に当たりまして、おいしい一皿をさしあげるに会場をどのようにセッティングしたらいいだろうか、季節感はどうだろうか、美術館との調和は、等々考えておりました。が、会場を拝見させていただけましたところお茶の道具で季節感を表現しなくても、ガラス越しに広がる見える新緑あふれる風景で季節感を充分味わうことができるので、絵馬のお菓子器とスペイン生活文化館で販売している駒饅頭で美術館との調和をとってみました。

そして当日さらに試作中のお菓子と手作りのお茶碗も頂戴いたしました。お客様においしい一皿を差し上げ

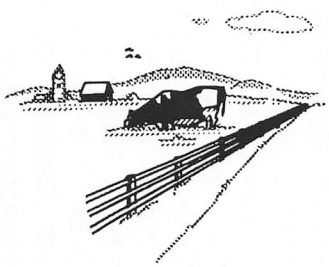
ることができました。二科展にいらした方々が、お茶の道具に興味をしめされました。私達とは見方が違い、一つの作品が出来る過程をいろいろ想像されていらしたようです。

この様にして一皿のお茶を通じて皆様方と交流ができて、心を通わせることができましたことにより私ども、お家元のスローガンでございます「一皿からピースフルネスを」を実行することができましたことをうれしく思い、又美術館役職員の皆様に感謝申し上げます。

そしていつか皆様方とモットと交流をふかめることができますように努力していきたいと考えております。

最後に「来年もどうぞお呈茶を行ってください。」の一言を頂きまして胸に熱いものを感じつつ帰路につきました。

本当に有り難うございました。



平成8年4月27日

春季二科展 オープニング・レセプション

来賓ご祝辞 を紹介します

鷹山宇一記念美術館 NEWS & REPORT

NO. 5
平成8年7月



二科会を代表して、
二科会理事・天野三郎先生
私は、鷹山美術館にかねがね一度来てみたいなあと思つて、それが実現した訳なんで、特に鷹山先生が、今日、昨日ですかこられて、こんなうれしい事はございません。鷹山先生と私の関係は、二科会で東京に支部がいくつかありまして、城北支部というのをやっておりまして、同人が確か五・六十人いたと思んですけれども、鷹山先生はその親分格で、私も随分酒の飲み方

なども教わった一人でございます。
この鷹山美術館春季展の前に、東京の、東京ではないなあれは、津田沼のクレストホテルで、十六日から二十五日まで開催しておつたんですけれども、かなり入場者が多くて、ホテルの方でも非常に喜んでいた次第でございます。
ここでも私は、陳列をちよつとお手伝いしたんですけれども、ご覧のとおり、例年になくがんばった作品をご覧に入れることが出来たんじやないかと思つて、

喜んでる次第です。また今日は青森支部の皆さんにお会いして、作品を見てまわり、いろいろと批評申し上げたんですけれども、かなりフアイトを燃やしている姿を見て、とても逆に元気づけられた次第でございます。
今日は、本当におめでとうございます。また、特に青森支部の皆さん、この作品を何回も見て、ひとついろいろと吸収していただきたいと思つています。簡単ですけれども、ご挨拶いたします。

二科会青森支部を代表して、
池田恭三先生

この度、七戸町並びに鷹山宇一記念美術館において春季二科展と青森支部展を併催させていただきました、厚く御礼申し上げます。日本におけるトップレベルの絵画と彫刻、これらを鑑賞できますことは、誠に私どもにとつて光栄と思ひます。今後、我々青森支部同人は、諸先生の作品を糧としまして、がんばりたいと思ひます。よろしくご指導のほどをお願い申し上げます。
本日は、本当におめでとうございました。



当美術館名誉館長であり、
二科会理事・鷹山宇一先生
年をとつてまいりましたら、足腰が立たない、耳は全然聞こえない、目もショボショボという状態になつてまいりまして、この美術館を建てていただきました時も、とてもでなくて寝ていたわけでございます。それをまあ通した訳で、ようやくここへ帰つて来ましたが、けれども、車椅子に乗ったきりでどうしようもありませんでした。それから、去年の二科の春季展を開催するということになりました、それじや行かなくちゃならないのかなと思つておりましたけれども、どうも具合が悪いものですから、かえ

つて倒れたりすると、本当こんなもんじやないから。それで、去年はこなかったわけですけれども、やつぱり生きてる間に一度ぐらいこうしてまいりまして、皆さんにご挨拶するのは、もうほとんど、これが最後ではないかと思つてございます。

まあ、幸いに大勢の方々のご支援によりまして、二科のこの春季展の方も、大変成績が良かったと、東京でも喜んでおる訳でございます。今年の春季展でございますが、最初に松屋におきまして開催したわけでございます。絵を見ると方々は、大変こう年々少なくなつてまいりまして、一体その後どうなるのかと思つて考へておつたわけでございます。春季展が終わりましてから、家の長女が二科の事務をやっておりますから、「いったい、人は入つてんのかい」と聞きまして、それなら、「入つてゐるわよ。一万余人も入つてゐる。」一週間に一万余人も入るといふのは、大変なことでございます。美術館なんかで展覧会をやることはありまして、ほとんど人は最近入りませんだいたいこの、地方の美術館なんていいますと、人が

入らないのは当然であって、入るのは不思議だというぐらいでございます。閑古鳥が鳴いて締め切りにしなきやならない。ところが、私幸いにここでもって、七戸の方々のご支援で、絵を売ってまいりました。また永年、三十何年間かかって集めました、この西洋ランプでございますが、ほとんどこの西洋ランプは日本では最近ありませんし、外国に行きましてもほとんどないわけでございます。ですから、買いに行くことはないもので、ここに持つてこられまして、地震が起きたわけでございます。地震が起きたらこれどうしようもございませぬ。その日は、八戸の地震なんという、こゝろは地震地帯の巣窟なもんで、ここが被害を受けるのは当然でございます。とにかくまあ、この人たちが何とか工夫しまして、ものが壊れないような方法がないかと、いろいろ考えて皆さんと相談したわけでございますけれども、とにかく、出来るだけのことはしよう。それで、今回も、一昨年を持ってきましてランプに代えまして、第二陣のランプを陳列して

いるわけでございます。ご覧になれば分かりますけれども、このようなランプがもう無いかという、まだ半分以上あります。それを持ってきて、この祭壇に飾りますと、ものの数になりません。ですから、陳列する場所をよく考えまして、壊れないような方法をとつたらどうだろうなと思つて、いるわけでございます。ですから、私の持つてくるランプはこゝへ全部集まりますという、それは日本にはございませぬ。日本有数のランプの展覧会になる。そういう風なものでございませぬ。絵の方は、二科の方でもって、毎年毎年展覧会をやつていくわけでございませぬ。ですから、絵の方はなるべく厳選しまして、いものをとにかく持つてくると、そういう風なことでやつていくわけでございませぬ。皆さんのご支援を大いに期待するわけでございませぬ。今後どうぞよろしくお願いいたしたいと存じます。

写真下

レセプションに出席された二科会の先生方(左より)岡村謹史氏・吉野毅氏・高野護氏・栗山淳氏・西野嘉斎氏

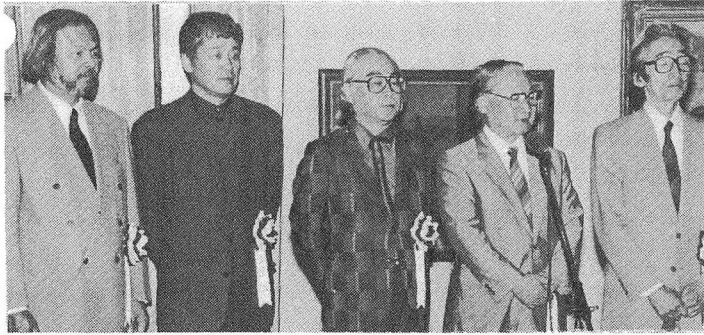
祝電披露

佐藤米次郎先生

鷹山宇一記念美術館、第二回春季二科展開催を祝し、出品者関係者皆々様のご健闘をお祈り申し上げます。

青森放送株式会社社長 奈良一正様

春季二科展の開催をお慶び申し上げます。日本洋画壇を常にリードされてこられた二科会による今回の催しは、訪れる多くの美術ファンを魅了することでしょう。会期中のご盛況をお祈りいたします。



館長日誌より

美術館長 佐藤亘

●静かです。

照明のグリーンという電気音。エアコンのザーと風を起す音。そんな中に、いかにもひっそりと鑑賞する人待つ館の姿があります。先般の春季二科展の賑わいなど嘘だったように思えるほど、今は静かな良い顔の美術館の毎日です。この忙しそくに通過するだけのせわしない時代に、まるで別世界にきたようにゆつたりと、しかもひとつひとつ噛みしめるように鑑賞されたり、椅子に腰を沈めて中庭の自然に瞳を凝らしているお客さんを見てみると、これこそが美術館の本当の姿であるのだと思わずにはおれません。

●7千人もの入館者に湧いた春季二科展。

一方、美術館にとつて建物狭く感じられる瞬間。それが春季二科展でした。今年も四月二十七日にオープンングレセプション、そして二十八日から六月二日までの三十六日間、春季二科展が開催されました。この間凡そ七千人もの人達がこの美術館を訪れました。四月二十八日三百十一名でスタートし、一番入館者数の多かったのはゴールデンウィークの最終日五月四日の四百七十一名、そして六月二日の最終日は三百八十七名でしめくくりました。

●中学生高校生の監視ボランティア

大人だけの春季二科展から子供たちも関われる特別展にしたいものと、町内中学校と高校に行つて春季二科展監視員のボランティアをお願いしました。結果として中学生が二十二名高校生が十四名計三十六名が監視に当たり立派にその役目を果たしてくれました。

私達の美術館の建物は、この四百人位が、ゆとりを持ちながら、列が切れない丁度良い状態を示す限界数値であるように感じました。今年、名誉館長である鷹山宇一先生が元気なお姿をお見せになり力強いご挨拶をいただきましたし、天野三郎先生はじめ二科会の理事の先生方や、二科会県支部の先生方も多数ご来館下さいました。そして、沢山の良いお話のお土産を下さいました。

又、会期を前に木村県知事、そして会期中は両副知事が日を違えてご来館。更に県会議員さん方も多数お見えになりそれぞれが感想を話されてお帰りになされました。国内でわずか三カ所しか開催しないというこの春季二科展、あれだけの大作がこの地にあつて目前で鑑賞できることの幸せを思いながら、毎年訪れるだろう春季二科展のこの美術館が待ち遠しい存在となるまでに人々に語り伝えられる時が来ることを願うものです。

生徒のみなさんにとつて全く初めての経験だったと思いますが、そこから得たいろいろの体験は、決して無駄なものではないばかりか、きつと良い体験として人生のどこかで役に立つことと思ひます。又、当美術館にとつても生徒のみなさんとの関わりを持つたこと

「馬を描いた郷土の画家たち」展

鷹山宇一記念美術館では春季二科展に引き続き特別企画展「馬を描いた郷土の画家たち」展を開催中です。本年は美術館に隣接する農林水産省家畜改良センター奥羽牧場が開設百周年を迎えることにもあり、馬をモチーフに描き続けてきた郷土ゆかりの画家たちを紹介するものです。

第一部として八戸市出身で現在馬を主題として制作活動を続けられている久保田政子さんの作品を、八月二五日まで展示いたします。八月二七日より九月三日までは第二部として七戸町に永住して馬を描き続けた上泉華陽さんの作品を展示いたします。開催前日の七月二六日に久保田先生と上泉華陽さんのご子息幸也氏を囲んでの懇談会がありましたので、その様子を報告します。

久保田政子先生

今日はお暑い中、お忙しい中をお出でいただいたありがとうございます。こういう記念展に、私の絵を飾っていただけるということは、すごく光栄に思っています。

馬を描いて二十五年になりました。はじめは本当に描けなかったんですけれども、どういったわけか私の血の中には、馬を描きたいという衝動がありまして、一番難しいテーマだったと思うんですけども、挑戦したわけでございます。馬をスケッチしに行きますと、スケッチブックを開いて描いていると、ヒョイツとこう、誰かに見つめられていような気がするんですよ。見るとそこに大きくて、優しい目がジッとこちらを見ていて、ドキッとするのですけれども、見られている私が何となく恥ずかしくなってしまうの

は、何故だか分からないですけれども、そういう気持ちを含めた絵をこの中に一枚掛けてあります。目だけの絵ですけれども、その中に「あるもの」を描いてあるんですけれども、小さなものなんですけれども、それを見ていただけたらなあと思っております。

これからの、馬の姿を通じて私の心を描き続けていきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

上泉華陽先生

ご子息幸也氏

今日はこの懇談会にお呼びいただきましてありがとうございます。

牧場の百年祭。百年と口では簡単に言いますけれども、国の機関としての百年となると、数少ない牧場の一つになると思います。明治、大正、昭和、それに平成と、戦前戦後を歩んできたこの牧場は、はじめは名称を農林省奥羽種馬牧場、続いて種畜牧場、そして今、家畜改良センターとなったようです。私の親父は、種馬牧場の時代に、とある取材の方の紹介で、たまたま北海道の方へ馬を見に行く

と言うことを話したら、「華陽さん、あなた北海道に行くんだったら、帰りに是非七戸の種馬牧場へ寄つたらどうか」と言われて、はじめは立ち寄る気はなかったらしいんですが、まあ、寄つてみようかということになったんだそうです。

ところが来てみたところ、自分が求めておった馬、いわゆるサラブレッドとかが何処に行っても見られないような素晴らしい馬ばかりがそろつておつたんだそうです。「私の人生はここだ」ということで、たまたまその日から、六十数年間、この七戸に住むことになったと聞いております。

牧場は、時代が変わって、家畜改良センターとなり、牛が主体になるわけですけども、百年ともなれば時代がまた新たに一年スタートして、より一層家畜改良に貢献されることだと思います。

今日ここに、久保田先生がお越しになっておりますけれども、久保田先生も日本の画家として有名な、馬を描いておられる方で、今回いろいろな作品を展示されておりますけれども、今日のこの懇談会の案内状の中に「久保田政子の世界」とありましたが、私

はその逆に、「世界の久保田政子」を目標にこれからもおおいに良い作品を描いていただけて、我々の目を楽しませていただきたいと思います。

第1部 久保田政子の世界 平成8年7月27日(土)~8月25日(日)

第2部 上泉華陽のうま 平成8年8月27日(火)~9月23日(月)

青森県南部地方は、古くから名馬の産地としてその名をなしてきました。七戸町もその例外ではなく、「平家物語」宇治川の先陣争いにも登場する名馬「生唼」は、七戸産と言われています。

昨年のグランドオープンにより、青森県内でもユニークな複合展示施設となりました「鷹山宇一記念美術館」には、六十数点にのぼる鷹山宇一画伯の作品以外にも、注目すべき特徴や数多くの美術品・収蔵品があります。会報の紙面を借りて、そのいくつかをご紹介します。道内では、今回はお問い合わせの非常に多い、「道の駅」の「文化村」のエントランス、美術館と物産館の中間にたたずむ、二頭の馬のブロンズ像についてまとめていただきました。

第2特集 美術館には何がある？

ダービー馬ヒカルメイジとフェアウインのブロンズ像

馬ブロンズ像雑感

七戸町教育委員会
生涯学習課長
戸館栄一

美術館と物産館の真ん中に二頭の馬ブロンズ像が向き合っている。ヒカルメイジとフェアウイン。いずれもダービー優勝馬であり、七戸の牧場で生まれ育った名馬である。

美術館に入館する際にいつも思わず微笑むのは、ブロンズ像の馬の鼻を撫でたり、身体を慈しむようにさすったりする人と出会う時である。その所作には、人と動物とが心を通わず情愛が感じられ、何とも言えない微笑ましいものがある。なにげないふりをしてずっと近寄ると、愛馬と交わすような会話が聞き取れる年代や馬との関わりによってか、それぞれの語りかけが異なり、立ち聞きするの

このブロンズ像は、文化村設計の最終段階で、馬と七戸町との歴史的な深い関わりを示すシンボルの一つとして計画されたものである。計画に当たって、当時の谷村開発室長が盛田牧場と濱中牧場を訪れて、両場長さんに主旨を説明し、資料の提供や製作協力について快くご承諾いただいた。モデルとなる馬は、ダービー優勝馬の中から選ぶことになり、ヒカルメイジとフェアウインの二頭を製作することになった。

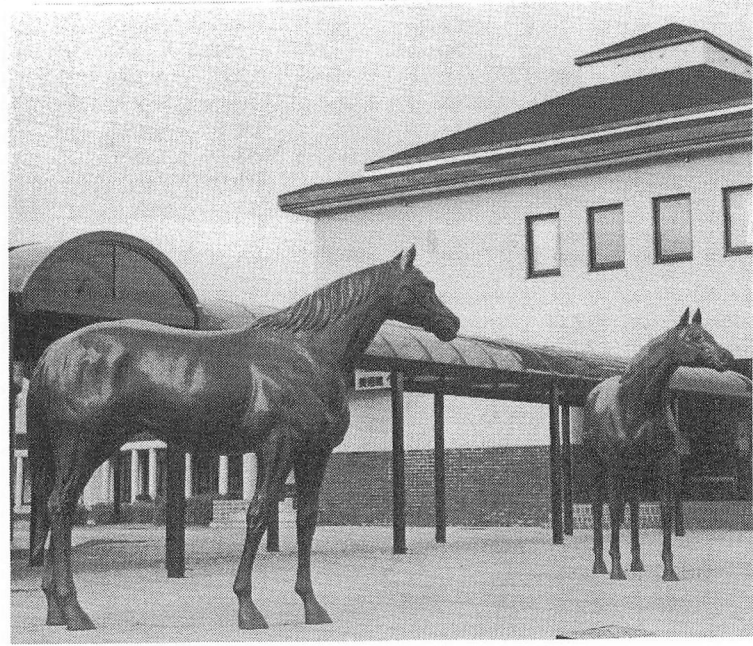
しばらくして、ブロンズ像の製作を担当する彫刻家の石黒先生が両場長さんを訪問し、ダービー馬の写真や育てたときの苦労話、現役中の活躍などを聞き、イメージを膨らませていった。石黒先生は「平家物語」で有名な「宇治川の合戦」で先陣争いをした「磨墨」を製作したそうである。いつの日か、七戸町で「生暖」を製作し、両名馬を自分の手で完成させたいものだとおっしゃっていた。七戸町と馬に関わる不思議な縁である。その時、ランプ館の

ステンンドグラスを製作した池内康さんのご両親が昭和十五年に奥羽種畜牧場に勤務されていたというのを思い出した。石黒先生、池

内先生とも、いわば偶然に製作を依頼することになったのであるが、馬と人と七戸町との縁の深さにびっくりにしたものである。秋になり、五分の一スケールの粘土模型ができたので、役場の会議室で谷村室長や両場長さんとともに拝見した。私にはどちらがどの馬かさっぱりわからなかったが、場長さんには一目でご自分の馬がわかり、その目の確かさに驚いたことを覚えていた。約二時間にわたり粘土模型を検討し修正を加えていったが、いちいち納得のいく修正であり、

競走馬の育成に心血を注いでこられた場長さんの馬への愛情の深さに感心したのもだった。石黒先生は、いやな顔一つせず、場長さんの意見に耳を傾け、手直しをし、それを見てさらに場長さんが検討を加えるという作業で、あつという間に二時間が経ってしまった。その日、石黒先生は再び牧場を訪れ、競走馬の顔と足を中心に写真を撮ったと聞いている。

さらに三ヶ月ほどした一月に実物大の最終モデルができたという連絡があり、谷村室長が盛田寛二さん、



濱中幾悦郎さんとともに富山県高岡市にある石黒先生の工房に赴き、最終チェックとなった。谷村室長にとって体力的には楽ではなかったと思うが、一つの作品が完成するまでの責任感とともに喜びを感じる旅であつたらうと思っている。ここでは顔や足など重要な箇所の検討、修正がなされ、いよいよブロンズ像の製作に入ったのである。両場長さんを目でチェックしていただいたブロンズ像が文化村に設置されたのは、雪も消えかけた春三月の後半であつた。

今、絵馬とともに馬と七戸町との関わりを表すモニュメントが文化村を訪れる人々を迎えている。幸いにして文化村を訪れる人々に、このブロンズ像は快く受け入れられているようだ。担当者としてブロンズ像の製作業務に携わったが、場長さんの馬に対する愛情の深さと慈しみの心に触れられたことがとても感動的なこととして忘れられない思い出である。

今、この雑感を書くに当たり、人と人とのふれあいの中でものを創っていくことの厳しさと喜びを思い起こしている。

初代館長を想う

平成六年八月一日鷹山宇一記念美術館が華々しくオープンし小原館長は創設期の困難を乗り切ろうと、足繁く館に通いスタッフの指導と激励に努めておられました。

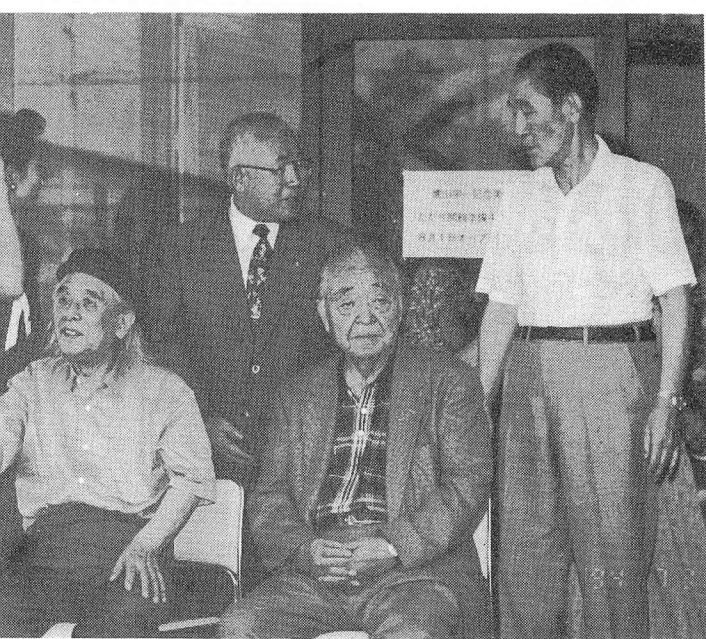
以前より体調はかんばしくなかったが、開館の興奮と忙しさの中で指導力を発揮し、時には少し強引とも見受けられたこともありました。

宿痾との激烈な闘いを周囲に気付かせなかった配慮を想う時、長年お付き合いを頂いたものとしては、な

んとも云えぬ腑甲斐なさを感じたものです。

平成七年七月十四日までの一年に満たない館長の病魔と美術館への拘りを思えば、美術館に携わる者として、改めて館長の志していたものは何であつたか、益々思いを深くするこの頃であります。

数限りなく頂いた間口の広いご教示とエピソードの中から、埒の無い私と巻いた一巻の歌仙がありますので「文人としての館長」の一面を披露させて頂きます。



両吟歌仙

「遊蝶や」の巻

- | | | | |
|----|-------------------------------|----------------------------|------------------------|
| 十一 | 遊蝶や夢まぼろしの
彩牙えて (平) | 十二 | バーを越え得ず
うずむく少女 (平) |
| 十 | 面影かげるふ
望郷の詩 (迷) | 十三・月 | 鼓虫や葉表にそるり
月背負ひ (迷) |
| 九 | 第三句
旅ゆけば片岨につつじ
群がらむ (平) | 十四 | 細身に叶ふ
藍の浴衣着 (平) |
| 八 | 長逗留も
三日過ぐれば (迷) | 十五 | マヌカンが
日毎に替わる飾窓 (迷) |
| 七 | 老釣り師沼にどつかと
月の雨 (平) | 十六 | 往來はげし
靴のかずかず (平) |
| 六 | 丹く小さき
背中の裕ぞ (迷) | 十七・花 | 花愛でる親は親なり
子は子なり (迷) |
| 五 | 霜ふんで岳稜を往く
墨衣 (迷) | 十八 | 慈しみ合ふて
春ぞ知るらむ (平) |
| 四 | 遥けきかなや
斑鳩の里 (平) | 十九 | 遠嶺に霧のただよふ
まだら雪 (平) |
| 三 | 葦原の流行歌など
あわれなり (迷) | 二十 | 首相歩けば
水玉揺れて (迷) |
| 二 | 身請けをするも
先立つ不安 (平) | 二十一 | ドラ息子早起しては
洗車する (平) |
| 一 | 恋河に渡る船無し
干魚食む (迷) | 二十二 | 雑踏を行く
ニナリツチの香 (迷) |
| | | 二十三 | ご亭主に愛もなさそな
力妻 (平) |
| | | 二十四 | 火鉢を抱きて
店子囁く (迷) |
| | | 二十五 | やつとこさ
朝がけに咲く寒椿 (平) |
| | | 二十六 | 円熟の筆紙に戯れ (迷) |
| | | 二十七 | 迷いなく嵯峨野を目指す
人の影 (平) |
| | | 二十八 | 野仏達の加護ぞ
うれしき (迷) |
| | | 二十九・月 | 廃材の軒に皎々月の秋 (平) |
| | | 三十 | 心とます虫時雨かな (迷) |
| | | 三十一 | 山頂に白きものあり
冬隣 (平) |
| | | 三十二 | 朱の研ぎ汁
下女の手を抜け (平) |
| | | 三十三 | 寝呆け眼のライトハ番
草野球 (迷) |
| | | 三十四 | 夕となれば紅灯儂ふ (平) |
| | | 三五・句の花 | 花雲に連れ出されたる
人の列 (迷) |
| | | 挙句 | 土手のたんぼぼ
今や盛りと (平) |
| | | 首・平成二年四月二三日
尾・平成二年五月十六日 | |

ビール好きの館長さんは酔うほどに、薄れゆく人間の絆を憂い、俳諧の連歌の復興を願い、「歌仙」を巻くことよって、連帯感と座の芸(複数芸術)が生まれるのだ、と声高になるのが懐かしく思い出されま

す。館長が「友の会会報」の一号に寄せた文章の一部を敢えてもう一度書き留めておきます。

「美は永遠であり、友もまた永遠なる絆をもって結ばれる。

「このお互いの触れ合いの中から、新しい文化の創造がふくらみ、開花してゆく。」と。

平成八年七月十四日
小原恭平大兄命日(記)

濱中達男

(写真上は、平成六年七月三一日記録的な酷暑の中で美術館開館式前日の打合せの様子。
左より鷹山宇一名誉館長・福士孝衛財団理事長・秋山庄太郎氏・故小原恭平初代美術館長)